音象徴語の語形（その1）

玉　村　文　郎

1　音象徴語の認定

いわゆる擬音語・擬態語をまとめて音象徴語と呼ぶことにする。音象徴語については多くの問題があるが，ここでは音象徴語認定の基準について考察する。何点かの音象徴語のリストや辞典の中に，時に音象徴語と認定するのがはばかられるような例が見かけられ，またとくに計量的な考察を進める際にはこの認定基準の問題は避けることができないと考えるからである。

たとえば，文化庁国語課『外国人のための基本語用例辞典』巻末の「擬声語・擬態語について」には，

おずおず　すれすれ　どろどろ

などの記載があり，浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』には，

うきうき　おずおず　おちおち　かすかす

けばけば　すれすれ　どろどろ　なみなみ

ぬけぬけ　ぼけっ（と）

などが挙げられている。天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』にも，

うきうき　おずおず　おちおち　かすかす

なみなみ　ぬけぬけ　ふさふさ　ぼけっ

などが見られ，また三戸雄一他編『日英対照：擬声語（オノマトペ）辞典』にも，

うきうき　おずおず　おちおち　すれすれ

なみなみ　ぬけぬけ　よれよれ

などが掲出されている。このように掲出語に差が生じるのは，編者の立てた基準だけでなく，採例時の資料や採録語数にもちがいがあるため，いたしかたのないところであろうが，通時的視点に立たなくとも，「すれすれ」などを，音象徴語に数え込むことには抵抗を覚える人が多いであろう。

しかし，このような「うきうき」「おずおず」「おちおち」「すれすれ」などが音象

徴語であると見なされるのは，音象徴語自体の本質にかかわっていると考えられる。つまり，擬声語・擬態語について「記号とする語音と記号化の対象となる種々の事象（音響を明確に発するものから，何の音響も発しない状態のものまでさまざまであるが）との間に，ある種のつながり即ち音象徴（sound symbolism）が存在すると考えられる語の一群[1]」と説明する一般のとらえ方に由来していると見られるのである。

2　認定の基準

そこで，定義の吟味を進めながら，下記の順により認定基準の私案を提出することにしよう。

(1)音素分布　(2)連濁忌避　(3)アクセント型

先ず，従来の「能記と所記の関係が有契的である語」とする定義では，語音の象徴的機能あるいは共感覚的機能の認定において，個々人の経験・感覚などの個人的主観的要素がはたらくことは避けがたい。このように<能記と所記の関係から>音象徴語を認定する方法には本質的に主観性に依存する部分があるため，どこかに客観化できない部分が残る。認定において客観性を強めようとするならば，どうしても能記つまり語形を相対的に重視するほかに方法はない。以下に，(1)(2)(3)の諸事項を徴標として，音象徴語を眺めなおしてみる。

(1)音素分布

濁音・半濁音が和語の語頭には立ちにくかったとされるが，音象徴語にはその例外となるものが多い。（「さっと書き果てて<u>ざっと</u>投げたぞ」<玉塵抄26>，「<u>ぴい</u>と啼く尻声悲し夜の鹿」<芭蕉・陸奥千鳥>）

同じようにラ行音も語頭には立ちにくかった。ただ，この傾向は語頭濁音半濁音忌避傾向よりもさらに強いためか，音象徴語でも語頭にラ行音をもつものは「れろれろ」「りーん」「るんるん」など，現代語においてもごく僅かである。ラ行音で始まる語は他の行で始まる語と比べるときわめて少なく，かつそのほとんどが漢語と外来語であるという顕著な事実が，和語音象徴語の生産をはばんでいるかに見える。

上記以外にも，一般語彙（無契語）に比して促音・撥音・半母音（/j/）・引き音節等の頻度の高いことが観察される。このうち /j/ を除くと，すべて成節音素で，単独で拍を形成するが，これらは大体において，その拍を有しない語形を基にして二次的に派生分出されたと見られる場合が多く，当該拍の有無がその語の語義の微妙な部分の形成にあずかっていることが多い。同時にこれらの拍はそれぞれ音象徴語の能記として特定の位置に出現し，逆に別の位置には出現しないという分布上の特性をもって

いて，そのことが音象徴語の諸タイプの成立に関与していると考えられる。

また，拍「り」の頻度がきわめて高く，和語音象徴語の多くが副詞であるところから，語末拍「り」は副詞（主として情態副詞）の代表的な語末形式と考えられるほどになっている。

かくて，「ごほん」「にょっきり」「ずんずん」「ばしゃばしゃ」「しーん(と)」「ぐっ(と)」「だーっ(と)」「けろり」「べったり」「ぼんやり」「ぼかん」「べとべと」などは，いずれも音素・拍の種類と位置，それらの頻度から，いかにも音象徴語らしい語であると考えられるものである。

(2)連濁忌避

無契語にあっては合成語形成に際して，いわゆる連濁の起こることが多い（コリル→コリゴリ）が，音象徴語の場合には連濁が起こらない。「コリコリ」「ヒリヒリ」「ソヨソヨ」「チョキチョキ」のような畳語が音象徴語にはたいへん多いが，どの畳語形式も連濁を生じない。「スッテン＋コロリ」のような合成語の場合もやはり連濁は生じない。このような連濁忌避は，音象徴語が本来原語基の語音の象徴性・喚起力に直接存立基盤をもつものであるから，いわば必然的な現象と解すべきであろう。したがって，非連濁の語は音象徴語である可能性が大きいと言える。

(3)アクセント型

和語の音象徴語には前項(2)において言及した畳語形式のうち，とくに2拍語基の畳語化形のような集中率の高い代表的な型がある。このような代表的な型として，

ア	2拍畳語（スヤスヤ　ベロベロ　ポキポキ）	42.86%[2]
イ	促音挿入＋「リ」（シットリ　ベッタリ　パッチリ）	12.77%
ウ	語基＋「リ」（コロリ　グラリ　パクリ）	12.01%
エ	撥音挿入＋「リ」（マンジリ　コンガリ　ゲンナリ）	2.15%

などを挙げることができる。このような代表型に属する語は，大体において，それぞれ次に示すように同一のアクセント[3]を有している。

ア　$\overline{\mathrm{X}}$YXY

イ　Xッ$\overline{\mathrm{Y}}$リ

ウ　X$\overline{\mathrm{Y}}$リ　または　X$\overline{\mathrm{Y}\text{リ}}$

エ　Xン$\overline{\mathrm{Y}}$リ

（ここで，X，Yなどは拍を表すものとする。以下同じ。）

一方，同一語形の無契語のアクセントは，

ア′　イ$\overline{\text{エ}}$イエ　ヒ$\overline{\text{ト}}$ビト　シ$\overline{\text{ミジ}}$ミ

ヒエビエ　ヤマヤマ（ヤマヤマ）

ムラムラ　クニグニ

イ′ ヒッパリ　ツッパリ　ハットリ

ヨッタリが行く（ヨッタリ行く）デッチリ

ウ′ クスリ　スズリ　オツリ　マツリ（マツリ）

エ′ インテリ　オンドリ　クンダリ　フンギリ　モンドリ　ジントリ（ジントリ）

のごとくであり，一つには音象徴語のア・イ・ウ・エの各型のアクセントと一致しないこと，二つには同一語形群の個々の語がさまざまなアクセント型に分かれてとりどりであることの2点において，音象徴語のアクセントとは明確に異なっている。無契語のシミルから分出したと考えられるシミジミという連濁形畳語副詞は，シミジミであって，ア型ではないが，同じくイソグから分出したと考えられるイソイソやウネ（ル）から分出したと考えられるウネウネなどはア型になっているので，あとの2語は音象徴語になっていると考えられる。

以上のように，拍の種類・数・位置などを考慮した語形（ア～エなど）のアクセントを勘案することにより，無契―有契の境界線上にある語の大多数はいずれか一方に分類することができるのである。

上記(1)(2)(3)の基準のうち，(1)と(2)とは消極的な基準で，(3)がやや積極的な条件だと言えるだろう。(1)や(2)では無契語との識別がなお不十分にしかできないが，(3)はかなり有効な基準であると見られる。

3　有契化手続（無契語と有契語の関係）

次に無契語との関連が想定できる有契語の一部をリストに挙げてみよう。

これは，かりに無契語を祖形語基と考えて，各有契語を分出する音的な手続＝有契化手続（いわゆる音素やかぶせ音素の挿入・付加など）を表にしたものである。この有契化手続はもちろん擬態語分出に関するもので，擬音語にはなじまない。

有　契　化　手　続

型／語基	無契語 XY-α	畳語 XYXY	長音化…＋リ X—Yリ	促音…＋リ XッY リ/ラ	撥音…＋リ XンYリ	その他 XYリ，XYン，XYッ，etc.
あさ	あさ-イ	あさあさ		あッさリ		
いそ	いそ-グ	いそいそ		いッそリ		
うく（k）	う-ク	うかうか うきうき		うッかリ		うかリ

うす	うす-イ -メル -ラグ	うすうす		うッすリ うッすラ		
うね	うね(-ル)	うねうね				
きわ	きわぎわ (シイ)	きわぎわ (シイ)		きッぱリ		
こが(g)	こが-ス				こンがリ	
こも	こも-ル				こンもリ	
さわ	さわ-ヤカ	さばさば		さッぱリ		
しず	しず-カ -ム	しずしず				しんずしんず
しな	しな-ル	しなしな			しンなリ	
しむ(m)	しみ-ル し-ム	しみじみ			しンみリ	
すく	すく-ヨカ	すくすく (シ)		すッくリ		
すず	すず-シイ				すンずリ	
すべ	すべ-ル	すべすべ		すッぺリ	ずンべリ	
せく	せ-ク	せかせか				
たら(r)	たら-ス	たらたら	たーらリ			たらリ たらン たらッ
たま(m)	たま-ル				たンまリ	
どろ	どろ	どろどろ				どろリ
なみ	なみ	なみなみ				
ぬく	ぬく-イ	ぬくぬく		ぬッくリ		
ぬけ	ぬけ-ル	ぬけぬけ		ぬッけリ		
のど	のど-カ	のどのど		のッとリ	のンどリ	
のび(b)	のび-ル	のびのび			のンびリ	
はな	はな(-ヤカ -ヤグ)	はなばな (シイ)			はンなリ	
ひか	ひか-ル	ひかひか びかびか		ぴッかリ		びかリ
ひそ	ひそ-ム -カ	ひそひそ		ひッそリ		
ひえ ひや(j)	ひえ-ル ひや-ス	ひえびえ ひやひや	ひーやリ		ひンやリ	ひやリ
ふく	ふく-ラム -レル	ふくふく		ふッくリ ふッくラ		
ふさ	ふさ	ふさふさ		ふッさリ		
ほそ	ほそ-イ	ほそぼそ		ほッそリ		

ほの	ほの−カ	ほのぼの			ほンのリ	
ぼや	ぼや−カス −ケル	ぼやぼや	ぼーやリ		ぼンやリ	ぼやン
みず	みず	みずみず（シイ）			みンずリ	
やわ	やわ−ラカ −ラグ	やわやわ			やンわリ	

4　音象徴語の語基

音象徴語が語形と語義との関係に強い関心をひくものであることは，その語性上必然的なものであった。小林英夫・佐久間鼎両氏の現代語の共時的論考以来，音象徴語の語形について考察が重ねられてきた。戦後は通時的な面における調査研究も，鈴木雅子氏・前田富祺氏らによって進められてきている。しかし，型の整理・型ごとの異なり語数・型相互間の関係・語基の分布などについては，まだ十分論じられたとは言えない状況である。たとえば，ＸＹＺのような３拍語基は音象徴語としては考えにくく，すべて語基は１拍か２拍であると考えられること，またＸＹＸのような分出形も存在しないらしいことなど，未解明のことどもが存するのである。これらのことについては続稿にゆずることとする。

（アクセントに関しては，1983年９月北京で金田一春彦教授からお教えいただいたことがあります。記して，お礼申しあげます。）

注

(1) 『国語学大辞典』による。

(2) 『分類語彙表』収載の音象徴語を型ごとに分類し，その異なり語数の百分比を出した。参看，玉村文郎「日本語と中国語における音象徴語」（「大谷女子大国文」第９号所収）

(3) アクセントはすべて『明解日本語アクセント辞典』（三省堂）によった。
なお，同語形でも「頭をコックリする」と「コックリした色」のように，意味のちがいに伴ってアクセントが変わることがあって，細かい点ではアクセント型で律し切れない場合のあることを承知しておく必要がある。